

Title	位相現象から一般語法へ
Author(s)	須山, 名保子
Citation	聖学院大学論叢, 12(1): 97-110
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=529
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

位相現象から一般語法へ

須山 名保子

Development of an Expression within a Phase into a Common Grammatical Usage

Nahoko SUYAMA

Today, young people use the bound-form ‘-zjanaidesuka’ in two kinds of new usage of the mood category. In several recent years, one of them has come into use as a common grammatical expression which even people in their forties use, while the other seems, as it has been, to be confined to the phase of the youth. This paper points out the differences between them and analyzes the primary factor that has caused them to follow different ways of linguistic transformation.

Of these two usages the former functions to bring up a topic concerning an information which is already known to the person spoken to. This feature, a known information, is common to three preceding usages which have been used in all generations. In contrast, the latter brings up a topic concerning an unknown information (in most cases, an information about the speaker himself). A significant difference lies between these two.

At first, the latter began to be used only in a colloquial, non-polite form ‘-zjan’ among the youth who live in Kanto and Tokai district (F. Inoue 1998). The form which ends with ‘-zjan’ functions laxly because it is dependent on the context or ‘bamen’ (given situation) in Japanese. In carefree conversation, we are apt to accept unfamiliar and unreasonable expressions. The form ‘-zjan’ was originally appended to a known topic, but was occasionally, and then gradually more often, used to end an unknown topic. However, the new usage which has developed in the mood category of the polite form ‘-zjanaidesuka’ should require a more reasonable condition of the mood so as to be stable as a new expression.

Key words; Phase, Form at the End of a Sentence, Mood, Information, Known: Unknown

1

ある位相に生じた表現が、急速に一般化してゆく。この現象はどの位相が発信元であっても起こり得るが、とりわけ年齢層それも若年層のことばは、大人たちの違和感の訴えや批判の対象になりやすいが故に、逆に上の年齢層にも刺激を与え、影響は加速する。ときには、若・壮の年齢層の支持を得て、老の層と対立し、“大人”の層が二つに分かれるという結果を招く。元来あった表現が衰える条件が、こうして徐々に整う。

言語に絶えず起こっているこの新旧表現の関係緊張と交代の関係を、身近に見る位相現象の一つから取り上げ、用法の拡張～転化の過程に働く因子を論じたい。そういう変化のもたらす結果の中には、“あるがまま”を受け入れるべきものもあれば、そうでないものもある。その形式の本来持つ意味内容とかけ離れた表現内容が生まれるには、その表現活動の細部にわたる点検が必要であるが、とりわけ文末表現は、位相現象に登場しやすく、よき考察対象である。

2

ここ2年ばかりのことではないか、次の言い方が若年層の発言で聞かれるようになったのは。

例01 「私ってパソコン弱いじゃないですか、就職活動に随分響くんですよ。」

念のため注するなら、話の聞き手は「私」のパソコン能力についてこれまで何も情報は持っていない者であり、その相手への発言である。例によって“大人”は眉をひそめる。つい先日もタクシー内のラジオで耳にした鼎談番組では、50代とおぼしき男性が、

何だ、近頃の若い娘は。事務所で雑談が食べ物の話になったら、例02「私って、ダイエット中じゃないですかあ」って不意に言いだすんだ。そんなこと俺が知るかって、文句つけたくなつたよ。

と、あまり品のよい口調ではないが、むきになって話していた。気持ちはよく分かる。この用法はまだ若年層にとどまっている様子だが、どこまで広がるだろうか。かつて、「私～するヒトだものですから……」を50近い教養ある女性の発言にまで聞いたときのショック^{注1}を思い出すと、(そしてこのヒト表現が今も健在であることを思うと、)新しい言い方の滲み通りの速さを警戒したくなるのも無理はない。

ところで、例01、02より前の段階として次の用法が出現したのも、古いことではない。数年前である。高年齢層にとっては今なお耳障りな感じが拭えないが、3、40代なら既に男女の別を問わず、よく使っている。

例03 「たとえば授業中によく学生からこんな質問が出るじゃないですか、……」

私が初めてそれを聞いた時の話し手は、大学で文学を講じる若い知的女性であった。話の内容も仕事に関する範囲のものだったせいで、私は、聞いた時の違和感を、「若い人だからかしら、きつい言い方だ。議論ふっかけてるみたい」と、驚いたのを覚えている。ところが「議論」や「理屈」とは無関係な、くだけた話題に流れて行っても、このジャーナデスカは繰返し登場する。そこに至って漸く、話題を起こすときの新しい言い方であることに気づいた。気づいてみると、周囲の若い層の口からは、「～するとしますね」「～なんですがね」という従来の「話題の言い出し」は、ついぞ耳にしなくなっていた。情報交換や討議の場では、前述のとおり20～40代の発言に、ジャーナデスカがすっかり定着していたのだった。

この先行する新用法について識者の論評がひとしきり活字になったのは、2年程前である。単語中心の若者語一覧にも、この表現だけは挙がっている（米川明彦『若者語を科学する』1998）。上記のとおり更なる新用法も生まれた。両者の間の新しいずれが、保守的な世代を驚かす。その旧世代の耳の反発感も、倦まぬ繰返しにいつしか薄れて、ある日人は、自分がかつて攻撃した語法を何気なく口にして現実に愕然とする。その「かつて」を「ついこないだ」と置き変えたいほど、新用法定着の速度が現代は上がって来ているのではないだろうか。

意味用法の転化過程も特に難しくなく跡付けられるこのジャーナデスカ文を、今改めて取り上げる目的は、1に述べたところにあるので繰返さないが、結論として二つの新用法は、“生き残る”と“消える”の2方向に分かれる可能性が高いと判断する。

3

2の否定疑問形式～ジャーナデスカ文の意味用法について、整理しておこう。

3.1 文末ジャーナデスカの意味用法

(1) 聞き手に同意を求める。否定疑問形式によって、肯定推量を強調し聞き手を誘い込む。

その① 状況による判断に同意を求める。

例04 明日は雨ジャーナデスカ。今夜の月に暈がかかっていますよ。

その② 記憶による断定に同意を求める。応答としての発言が多い。

例05 彼、今日は休みジャーナデスカ。昨日たしか届けは出してる筈です。

「今日は休みジャーナカッタデスカ」とときをタ形にすると、「休みの筈だ」と、記憶の確かさを表す。このタは記憶発生のときを示すもので、次の例のように未来のことも使えるが、

例06 出発は明日の午後3時の便ジャーナカッタデスカ。

その①の状況判断には使えない。

なお、確かさの中間に「休みジャーナインデスカ」がある。

- (2) 話し手が状況判断を確信を以て聞き手に伝え、同意を求める。こうなるに決まっていますね、あなたもそう思いますよね、という感じだ。(1)のその①の確信度が発展したもので、その①との違いは形式に表れていて、イントネーションが(2)では上昇しなくなる。

例07 そうそう、それが楽しいジャナイデスカ。(週刊文春99・6・17)

例08 それを今、どういう取り上げ方をしたら、大衆が面白がるかを考えてやってるわけだから、しょうがないことジャナイデスカ。(同)

- (3) 聞き手に関する旧情報を確認することで、新情報との違いをなじる。(結果がよい方向に向いても攻撃調。) 聞き手は詰問された・非難されたと感じ、緊張する。(1)の②が少し歪んで発展したもの。

例09 昨日までは行くと言ってたジャナイデスカ。(今日になって急に行けないだなんて、ひどい。)

例10 電池がないって大騒ぎして、ここにちゃんとあるジャナイデスカ。

- (4) 旧情報～広く知られていること・一般常識・その場の話題や議題として当然予想される事項などを、持ち出して、情報・話題の場の共有を確認する。

(3)との差異は、話題の発展の方向が、未定なこと。つまり、肯定・否定、あるいはそのどちらでもない新しい展開の可能性があること。新用法の1。

例11 この間先生が急に御都合悪くて、ゼミ生だけでコンパやったジャナイデスカ。あのとき、傑作だったんですよ、……。

例12 今、男でもピアスしてる子、けっこう多いジャナイデスカ。あれ、どう思われます。

例13 会社訪問でいえば、みんな紺やグレイのスーツで行くジャナイデスカ。でもたまに大胆な人、いるんですよ。この間なんて……。

(この例も、驚いたという報告であり、非難しているのではない。)

- (5) 新情報(主に話し手に関する)を話題として持ち出す。(4)とは話題設定という点で共通しているが、(4)が(1)～(3)から受け継いでいる確認という要素を失ったことが、変化を大きく認識させる。話題の中心に話し手が自分あるいは自分側の者を置くことで、おしつける態度を余計感じさせる。

例14 私ってどっちかっていうとスポーツ苦手ジャナイデスカ。みんなであつと遊ぶとき、ひるんじゃうんです。

(続く発言の区切りまで、聞き手は黙って聞くしかないのである。言いだしの「初耳」の情報に「へえ、知らなかった。そんなこと聞いてたっけ」などと相槌を打つ必要はない。)

例15 うちの方、西武バスジャナイデスカ。何系統あるかっていうと……。

- 3.2. 文末ジャナイデスカが成り立った時点での形式構造は次のとおりである。

〔表A〕

むすび ^{注2}	みとめ方	とき ^{注3}	場面敬語	判断レベルムード	伝達レベルムード ^{注4}
デ-	否定	非過去	丁寧	疑問・未決	質問
ジャクデハ	ナイ	0	デス	カ	イントネーション(上昇・非上昇 ^{注5})
(言い換え)×アリマセン ^{注6}					

3.3. 上に3.1.で辿った用法の変化を, 3.2.の形式構造の中で捉え直してみる。

① このむすびは(1)の段階ですすでに形式化している。ダヤデアと違って, 動詞文も形容詞文も承接すること。いわば「 」に入るまとまりである。承接が不自然でないという点では, デショウと同じ質のもの^{注7}。

② みとめ方が否定としての積極性を失う。

③ 場面敬語すなわち聞き手に対する敬意を表す丁寧表現は, 表現価値を失わない。

④ 判断ムードで表した〈文の内容に対する疑問〉と, 伝達ムードで聞き手をめざした〈質問〉との連結で本来成り立った〈問いかけ〉は, 疑問が形式化すると同時に始まるイントネーションの変化のいくつもの段階で, 新しい(判断+伝達)ムード用法を生み出している。すなわち疑問が後退し, 質問の質が幾つもの目的に修正される。

〈問いかけ〉の印の上昇イントネーションを辛うじて保つのが, (1)の〈聞き手の反応を窺う〉である。判断の内容に確信度が加わり聞き手に押しつける度が増す(2)のイントネーションでは, 明らかに下降が起こり, この形式全体の発音加速と音量低下を伴う。(3)の〈詰問〉では, この形式が承接する「 」でまとめられる表現内容の述語部分に, 音声面では最も強調がかかる。それを承けたジャンイデスカの部分も, 末尾の母音を延ばすことがあるなど, 音声的に消極的にはならない。

(4)と(5)においては, 〈聞き手の注意を惹く〉点では同じだが, 「論議」と「雑談」という叙述内容の違いが, 音声面の際だたしさと軽さという違いに出る。

⑤ (1)から新用法の(4)までに共通しているのは, 〈旧情報の喚起〉が何らかの意味で関わっていることであり, (4)の新しさは, 次のことである。

(1)~(3)の情報は, 話し手乃至聞き手の個人的経験の範囲を出ないのに対し, (4)の情報は, それに加えて一般的あるいは普遍的知識をも扱い得る。

この拡張が作用してか, (5)では〈新情報の喚起〉という大きな転換が起こり, 情報の範囲は逆に話し手側のごく個人的なものに限られているのが, 現状である。

4

新旧用法の比較考察

4.1. 文の叙述内容を否定して問いかける文末形式が、どういう気持ちを伝え得るかは、他の言語にも共通する面と、日本語においてのみ著しい特徴を持つ面とがある。

ジャーナイ(デス)カ形式をよく知るために、多少の回り道を承知の上で、文末形式に関わる事項をここで概観する。

4.1.1. 否定疑問文の用法に先立って、比較検討のために、肯定疑問文の運用について一瞥しておく。(以下ではイントネーションをイント. と略記する。)

(a) 上昇イント.〈疑問を質問として聞き手に差し出す〉

疑問～質問の範囲内に納まる。話し手は聞き手から肯定・否定いずれかの叙述内容を情報として受け取りたいのであり、応答が肯定・否定のいずれであるにせよ、気持ちの動き方に決まったパターンが生じることは無い。

例16 明日の会議は10時に始めますカ。

疑問詞疑問文と対等の表現価値を持つ。

例17 明日の会議は何時に始めますカ。

(b) 下降イント.〈現実に対する感慨〉

不満でも感動でも言える。話し手自身に関わる現実を捉える。

例18 今日は1限から4限までぶっとおしで授業カ。

例19 おーっ、初経の刺し身カ。

例20 おお、よしよし、おじいちゃんとお散歩するカ。

疑問詞疑問文でも機能の根幹は同じ。

例21 彼以外の誰がこんなアイデア思いつくカ。

例22 いったい何時だと思ってる。

同じ叙述内容を断定文でいうときの差異が何かは、「4.2. 言い換えの形式」に扱う。

(c) 下降イント.〈新情報確認〉

聞き手のもたらした情報を確かに受けとめたという発話である。

例23 そう、優等で卒業したカ。おめでとう。

例24 ああ『タイタニック』、もう御覧になりましたカ。

(d) 下降イント.〈予期事実納得〉

例25 へえー、そうカ、やっぱり。

(b)(c)との差異は、叙述内容(よくも悪くも予期されていた)を心に納めるのに要する情

緒エネルギーの働きの向きにある。大枠に収めるならば(b)(c)と共に扱えることはいうまでもない。しかし(d)は(b)(c)より～(ナ)ノカと名詞節になりやすく、名詞節になった場合は詠嘆ではそぐわないニュアンスがあり、納得へ向かう心の動きが盛り込まれる。納得には、予期の答えや再認識に対するものなどがある。

例26 帰ってきたノカ、とうとう。

例27 結局どうしても単身赴任ナノカ。

(e) 上昇みイント. 〈揶揄〉

否定の返答を予期してやや挑発的に。(c)に落ちつくのを拒む間に現れる。

例28 そう、あの女が好きカ。今でも。

4.1.2. 否定疑問文の従来の運用範囲は次のとおりで、ジャナイデスカ文は(g)と(h)に属する1形式である。⇒5のII

(f) 上昇イント. 〈未決定の事柄について、選択の正否を問う〉

聞き手は、応答を「いや、～シマスヨ・～デスヨ」と、否定疑問を否定する肯定的内容か、「ええ、ちょっとね、(～シマセン・～ナイデス)」と否定的内容かで答える。(応答詞の肯定否定は、内容とは逆。)話し手は、その応答が否定内容であっても受け入れる気持ちを準備している。そのために一よりも遠慮がちな物言いとして使われる。

例29 この服、あなたの好みに合いませんカ/合わナイでしょうか。

疑問詞疑問文の場合は応答・応答詞のあり方が少し変わる。

例30 この役にふさわしい人、誰かいい人、知りませんカ/知らナイですか

ここでは、応答が一跳びして「はい」で始まり、肯定的内容が続くか、「いいえ」で始まり「あいにく誰も思い当たりません。」と否定的内容が続くか、になる。疑問詞という内容の空白が、文末の否定形式を制して働きかけるから。

(g) 上昇あるいは下降イント. 〈判断の正当性あるいは記憶の正しさの確認〉

「そうです」の答えを予期している。自信があるほどイント. は下降する。

例31 今月中の復旧は無理じゃありませんカ? (判断)

例32 たしか前にもこの番組に出演していただきませんでしたカ。(記憶)

論文調の文末形式でよく用いるが、この場合音声化すれば多く非上昇イント. になる。聞き手の意向を重視する姿勢でいて逆に断定を印象づける機能。疑問～質問の形式により聞き手への能動性が強調されるのである。

例33 政府当局は一刻も早く対応策を講じるべきではナイカ。(判断)

(h) 上昇イント. 〈勧誘〉

聞き手が断る余地を残している。～シヨウ・シマシヨウより遠慮がち。

例34 もう一口、召し上がりませんカ。

例35 よかったら一緒に出かけナイカ。

- (i) 下降イント。(怒った命令～禁止)

敬体では言わない。(丁寧体～マセンカでいうと忠告になり、(h)勧誘と合流)

例36 止さナイカ。

例37 早く乗らナイカ。

- (i) 下降きみイント。(詰問)

旧情報の確認がすなわち新情報への不満の表明に直結している。確かめる形で相手の変節をなじる。

例38 もう煙草はやめるって言いませんでしたカ。

例39 もう煙草はやめるって言ったじゃありませんカ。

二つの例文では、否定疑問の構成順序の違いがそのまま、詰問の語気の強さの差異になっている。ジャンナイデスカ文は後者に属する。後述。

4.2. 言い換え可能の形式との比較

他の表現の代替させた結果の差異によって、肯定疑問文と否定疑問文のニュアンスについて、更に考えてみる。

4.2.1. 肯定疑問文を別の形式に言い換えることは可能か。

- (a) 言い換えは、無い。できない。

- (b) 述語動詞や述語形容詞+カに加えて、それらの連体形+コトカも、安定した表現形式である。(これは言い換えからは外れるが)

〈感動〉は述語名詞+むすびの形式でも成り立つ。述語動詞・述語形容詞だけでも、更には述語名詞だけ(むすび0)でも〈感動!〉は表現できる。

例40 おーっ、初鯉の刺し身ダ!

例41 おーっ、初鯉の刺し身Ø!

例42 万歳、受かったØ!

例43 有難い0! 恩に着るØ!

19のカは40のダと交替する。41・42にはカを付加できるが、43では、形容詞文にも動詞文にもカは付かない。カの性質を考えると、看過ごせない現象である。40～42が事実の認識に基づく発話であるのに対して、43は話し手の心情に発する発話である。同様に話し手の身体感覚の表現もカは付かない。終止形だから付かない、という承接の問題ではなく、感動の出し方としてカが対象化を条件とすることに気付かされる。

例44 「ああ、かゆい0!」^{注8}

- (c) 若年層はここに～(ナ)ンダを用いる。近年高年層と対立している。⇨4.3.

(d) (c)と同じく～(ナ)ンダを用いる。

(e) 同じ～(ナ)ノを下降ぎみに発音すれば、～(ナ)ンダと同じく断定文になり、叙述内容は変わらないが、表現効果は失われ、(c)に吸収されてしまう。一緒に使う感動詞(たとえば「へえー・ふーん」などの声音も関わる、微妙な物言い。

4.2.2. 否定疑問文は別の形式で言い換えることは可能か。

(f) ～デスカ。～シマスカ。叙述内容の部分について否定疑問はそのまま肯定疑問に換えられる。ただし否定疑問を成り立たせている表現心理はその言い換えによって霧消するから、ムードを重視すれば言い換えは不可能だというべきである。

否定疑問文の表現する何気なさと言うべき心理状況を分析すれば、次のごときである。問いに先んじて話し手の選択判断があり、話し手は問いを未決定の問題として差し出ししながら、自分の選択に対する聞き手の反応を知りたがっている。この場合、否も応も受け付ける心の準備がある。

(g) ～ダト(判断)・～ダツタト(記憶)私ハ思イマスガ、アナタハイカガデスカ。この言い換えで叙述内容部分が肯定であることが明らかになる。その判定を聞き手に委ねる手順を踏む。聞き手を重視し、聞き手に依存する。

(h) ～シマショウ、イカガデスカ。聞き手に行動を起こさせる(話し手と共起のものも含めて)。聞き手に決定を委ねる。

(i) ～シロ、ドウダ。形は聞き手に決定を委ねるが、高圧的で緊張度が高い。

(j) ～デシタネ。ソレナノニ……。聞き手側の過去の言動が叙述内容であり、その記憶(話し手・聞き手が共有する)を確かめることを、こう言い換えると、背反の事実が誇示されて、聞き手への直接的攻撃になる。

否定疑問形式の表現効果は、以上の(g)～(j)の言い換えが等しく示したとおり、次の3点の特徴を持っており、その特徴がジャナイデスカ文においても発動しているはずである。

- ① 叙述内容は肯定的事柄である。
- ② 聞き手に判定・決定を委ねる形をとり、聞き手への配慮が大きい。
- ③ 言い換えでは聞き手への働きかけを担う伝達のムードが変質してしまう。

4.3. イントネーションの関与——ムード形成に対する

否定疑問形式文の文末は、今までにも触れたように、上昇イント. で伝達のムードが完結する。叙述内容に向けた疑問が、聞き手を目指した質問として働くには、上昇イント. を外せない。ただし、疑問詞疑問文では上昇イント. は積極的にも消極的にもなる。

聞き手が叙述内容を受け入れる(「応」で答えを得る)ことが前提となり、疑問の表出が不要となった発話(ジャナイデスカ文(2)～(5)がこれに相当する)に現れるイントネーションは、上昇とい

う積極性を失う（非上昇）にとどまらず下降へ傾斜する。その形式は、聞き手に対する話し手の微妙な心の使い方、すなわち予期・思い入れ・干渉などを表す。

(g)では、場面によって、上昇が残されるもの、下降を鮮明にするものなど揺れるが、(j)のイントネーションは一定して下を向く。このイントネーションの型を取って上昇対下降の二つに分けようとする理由は、文末が担うムードの変化と呼応するという見方による。今丁寧の部分を外して示せば、～デハナイカ・～シナイカであるこの文末形式のムードは、カ上昇とカ下降とで、ムードの形成に大きく変化が生じている。

形式カを省いてもイントネーションの上昇があれば、略式とはいえ（社交の場では洗練して聞こえる場合もある）、ムードは充分伝わる。その上昇を失うと、叙述内容は疑問から断定に変わり、カ下降は専ら聞き手を目あての態度表明を表す。

文字化されない音声形式部分の変化が、文伝達の大事な面を変えることを思うと、文字資料に頼る古典語の踏査に一抹の不安がよぎる。ただ文献資料にあつては、純粋な口頭語が録される機会は少なく、文字を通して理解可能なかたちへの配慮を受けたものが優勢なのも事実であるから、その点に依り頼むしかない。

4.4. ジャン（カ）の存在（井上説）

当該の文末形式に立ち戻れば、～ジャンイデスカ文については、井上史雄の見方（『日本語ウォッチング』岩波書店1998）が二つの要因を示して有益であるので、引用する。

こんな「……じゃないですか」の用法が出てきた根源は、これまたデスマス体の発達にある。この言い方は、古くは「……じゃありませんか」と言われていた。これなら用法によっては、抵抗を感じさせない。以前から聞きなれているせいもあるだろう。[須山注 動詞+マスと形容詞+デスの否定疑問文の表とその説明は略す] ここでも上段のマスの用法拡大が先に確立しデスが後から追いかけているように見える。

会話の前提としての相手との知識の共有については、場面によって要求度が違うらしい。ダ体の会話の場合は、あまり堅苦しくないのも、相手がすでに知っているかどうかなどを気にしないで言える。「おれ、四月一日生れだろ。だから……」は、ふだんの会話なら許されそう。これをデスマス体で言おうとすると、「わたし四月一日生れでしょ（う）。ですから……」になる。これも何とか許されそう。地域差・個人差が大きいようだが。

この文脈で「……じゃない」「……じゃん」は、上昇調イントネーションを伴うものも下降調で言われるものも、日常の会話でよく使われる。「あたし四月一日生れじゃない。だもんで……」「あたし四月一日生れじゃん。んで……」などは、いかにも若い子が言いそう。「じゃん」のこの用法も東海地方起源の可能性もある。これをデスマス体に直訳すると、「わたし四月一日生れじゃないですか。ですから……」ができあがるのだ。（pp. 152-154）

引用部分を限っているので伝わりにくいおそれがあるが、この論はジャナイデスカ文を、次のように、変転してとどまらない言語現象の大河の中に位置づけている。pp. 154-160

(1) この表現は、親しい同士の気のおけない・小さな瑕は見逃してもらえる場面での、非敬体の会話「……じゃん。んで……」で発生し、形式を敬体に置き換え（直訳して）、場面を拡張して成立した。

(2) その成立の背後には、デスマス体、特にデス体の機能拡大・用法進出があり、ジャナイデスカ文はデス体の整備に貢献する表現である。

同書は、Ⅱ章を「[じゃん]の来た道」として共時・通時両面からジャン（カ）の東京進出を記述している。前掲(1)の、新用法発生 of 動機に関する意見は、その実績の成果とも言えて、説得力がある。⇒5のⅡ

ただし、論述の中の、デス体の整備に関しては、限度があると私は思う。すなわちデスが丁寧体として、ダの使われるあらゆる所に交替可能な存在になるという整合現象は、今後も現実には起こり得ないのではないかと考えるが、今ここで触れるゆとりはない。

5

ある位相に発生した現象が、短い期間のうちに、その時代に一般的といってよい語法に成りおおせるか否かには、どんな要因が働いているのか。これが1の出発時から掲げた問題意識であった。場面や文脈が自然に要求する表現動機の積み重ねが、ムードを担う文末形式の機能を支配して、一定の方向へ用法変化を導いている。3, 4で述べてきた視点を総合して、ジャナイデスカ文における変化の方向を、次のようにまとめる。

I. 文末形式ジャナイデスカ5種の特徴と転化の跡を、順を追って一望できるよう、下に表にしてみる。

左右に渡った太い破線---は、参考に挙げた否定文+疑問文のジャナイデスカ文と、否定疑問文全体で新しい接合ムードを担ったジャナイデスカ文の境目を示すものである。

破線---はまた、上述の境界に匹敵する差異がジャナイデスカ文の内部に生じた印でもある。下の表の短い破線について、Ⅱでその転化の軽重を検討したい。

境界より上の形式について一言述べる。これは、「XはYジャナイ」という〈否定〉のみとめ方のむすびの文を叙述内容とし、それを目あてに〈疑問〉の判断ムードが働くもので、〈疑問〉ムードは丁寧さと一体となったデスカで表れている^{註9}。その〈疑問〉を〈詠嘆〉とは区別して聞き手に伝えるために、伝達ムードは上昇イント. で〈質問〉の意図を聞き手に受けとめさせる。このジャナイデスカ文は、注7に後述するジャナイデスカ文で補強される。

煩瑣ながらここで触れておきたいことがある。「ジャナイ」の丁寧体は、本来「ジャアリマセ

ン]であって、「ジャナイーデス」ではないことである。さればこそ「ジャアリマセンーデスカ」という確かめの疑問+質問形式も成り立つ。ジャナイーデス、すなわち形容詞形のデス丁寧体成立は遅く、デショウやデスコト・デスネなどの力に引かれて形成しつつある途上なのである。

〔表B〕

文末	特徴	承接		叙述内容	ムードの核		伝達ムード音声 イントネーション	
		否定文肯定文の限定	言い換え		判断	伝達 ⇄聞き手との応答		
否定文ジャナイ +疑問形デスカ		聞き手の否定文発言を受けて	——	否定発言の確認	疑問 質問	肯定否定未定	上昇	
ジャ ナイ デ ス カ	旧用法	(1)	話し手の発想の文 限定なし	ジャアリマセンカ可能 デショウ?多分~デスヨ	{ 判断の正否・記憶の 確認	{ 断定+質問 念押し	肯定を期待 否定でも受容用意	上昇 ~非上昇
		(2)	限定なし	ジャアリマセンカ可能 デショウ?デスヨネ	{ 判断の正の主張 確認同意要請	持論主張	肯定を期待 否定なら反論の	下降
		(3)	限定なし	ジャアリマセンカ可能 デシタヨ、ゼツタイ	{ 旧情報の確認のかたちで 状況への不満表明詰問	{ 強調 非難	抵抗を予期 釈明 ・対話継続を期待	下降
	新用法	(4)	限定なし	ジャアリマセンカ可能 デショウ?/デスヨネ	{ 旧情報一般情報による 確認と発題	注意喚起	論題・論理へ 注意を向けさす	下降
		(5)	ジャンの緩い 雰囲気*が下敷き	ジャアリマセンカ不可能 ナデス/デシテネ	{ 個人的新情報による 前提なしの発題	注意喚起	話し手への 関心を期待	下降

II. カテゴリーの面からの構造分析の結果、新用法の一つはムードの自然な転化として位置づけられるものであることが分かった。いま一つの最も新しい使い方は、その延長上に無条件に位置づけることはできない。〈発題〉して聞き手の〈注意喚起〉をするムードは、そのまま受け継いでいるのだが、〈発題〉の情報内容の質が、直前の用法と逆と云いたいほど違っている。話し手・聞き手の双方にとって「既知」^{注10}であるべき情報が、聞き手にとっては「未知」のものにすり替わっている。そのすり替えられた既知という要素は、表Bの(1)から(4)を通して生きてきた要素なのである。他方、新登場の未知の内容は、話し手個人に関わる小さなものに限定されている。

なぜそのようにすり替わりが発生したかと言えば、4.4.で紹介したジャンを使う「仲間うち」という場面の背景なしには考えられない。待遇的に常体というより一つ下の「ぞんざい」体のジャン文においてこそ、既知⇄未知の飛躍が先ずあつたであろう。その丁寧語訳という、如何にも待遇に無頓着な応用も継起した。それがジャナイデスカ五つ目の用法である。

それでは、この最新用法は定着するであろうか。程なく30代も40代も、人々はジャナイデスカ文に新しい意味を載せて使うのだろうか。否、(4)と(5)の進路は大きく分けると私は予測する。

語義の変化には、〈何気なく〉という意味をナニゲニ（若い年齢層に使われている。現在はもう少し語意が広がって、〈気付いてみるといつの間にか〉の意にも使う）が担うように、否定→肯定の地滑りも時にはある。しかし、聞き手への働きかけという一翼を担うムードの形式で、ここに持ち込まれた変化は、混乱を招くものと私は受け取る。ジャンの世界からのいささか早過ぎる移行が、一般語法に落ちつくには、移行を支持する要素が補充されねばならない。

今日視聴覚を通して個人の受け取る言語量は、甚だ増大した。それに従い、位相現象の一般化も高速時代に入っている。この速さは、たとえば敬語という領域にとっては中心問題とならざるを得ない。表現の基準をどこに据えるかという問題が、言語活動のさまざまな分野に認められる現象を通して、私たちの確かな価値観を求めている。

注

注1 現代語のヒトには、待遇の点から見て、2通りの用法がある。一つは、尊敬のカタ（方）と対立するニュートラルなヒトである。これは他者を指すとき使う。

例45 あのヒトなんて言っちゃ失礼よ。あのカタとお言いなさい。

自分や自分側の他者のことを客観的に説明するときの語には、本来「者」あるいは「人間」がふさわしい。次のようにへりくだりのニュアンスで使う。

例46 気の利かない者でございますが、誠心誠意努めますので、どうか見守ってやってくださいませ。

ここに自分の意味でヒトを代入すると、話題の人物を少し話し手から切り離して軽い敬遇のニュアンスになる。問題の（私が誤用と思う）ヒトの用法は、話題の人物は「話し手=私」に限り、話し手側の他者を扱うことはしない。

例47 「私って油っばいものだめなヒトなんですよ」

この型の表現の本来は、「なヒト」を削除したかたちである。「・・・だめなんです」で十分なところに強調が加わった。一世を風靡した対句のCM、

例48 「あなた作る人、わたし食べる人」（カレールーの広告）

あたりに、発生源があるのだろうか。

注2 「むすび」は copula に近い概念として使う。「繫辞」「繫詞」「連辞」「判定詞」等の名称が先行するが、日本語の構文の性格上、つなぎではなくてむすびという捉え方（鈴木重幸『日本語文法・形態論』むぎ書房1972）を用いたい。

注3 テンスに近いカテゴリーに「とき」という術語を充てるのは、日本語文法に表れる時間の捉え方の特徴を前面に押し出すためである。

注4 3と同じくカテゴリーの呼び方と指す範囲の問題である。「叙述」と対する「陳述」の大きな影響のもとに、その後のムードやモダリティの概念がさまざまな検討を経、実践を経験することで、規定の精密さを増してはいるが、後の2語の欧米での文法用語としての内容に加え、日本での用語相互の関わり合いで、概念内容は複雑化している。モダリティに寺村秀夫はテンスで扱うタも含めた（『日本語（現代語文法）』三省堂1989）。ここでの用語の使い方は、働きに判断と伝達の2種類を認める立場である。同じ内容をモダリティの名で呼ぶ立場もあるが、日本語文の中で使用するのに、他術語と調和のとりやすいムードを、敢えて使うことにした。この2語については、近藤泰弘「ムード」（『講座日本語と日本語教育4』明治書院1989）、益岡隆志『モダリティの文法』（くろしお出版1991）、仁田義雄『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房1991）参照。

注5 「非上昇」とは、積極的上昇のないものから、積極的下降までを含む概念。

注6 ×記号は、ジャーナデスカがこの用法に限ってはジャアリマセンカに言い換えが利かないことを表す。

例49 失礼ですが、この傘、お宅のジャアリマセンカ？

例50 ほら、言ったとおりジャアリマセンカ。

等においてはジャーナデスカに先行する、より自然な言い方としてこの形式はよく使われていた。それが「言い換え ○」という見方に相当する。

注7 「～じゃない。」という文、すなわちみとめ方が否定で、判断ムードが形式0の文を、話し手の見

解として同意を期待しつつ聞き手に確かめるといふ発話では、デスカではなくて、ンデスカが接続する。～ジャンイデスカと～ジャンインデスカは似て非なるものであり、構造の面で連結点が異なる。すなわち前者は連結点が形式の頭に来て～ジャンイデスカとなり、後者は形式の中に位置するジャンインデスカである。

注8 古典語の時代からある、疑問⇨詠嘆という転化は、疑問文にするために事実をまとめる過程で、対象化が起こり、その対象に向けて感情が動くという仕組みにまとめるものであろう。話し手自身の「かゆい!」とか「さむい!」という身体的反応の叫びと、それを客観的・反省的に「何とかゆい(さむい) ことか」とまとめた表現に仕立てたものとは、感動の質はかなり変わっている。

注9 このデスカにとって判断ムードの力は略せないものと思ってきたが、最近はい買物客に洋服屋の店員が「スーツです?」と声を掛ける例が報告されており(4.4. 井上1998)、驚く。「あなたが探しているのは、スーツか?」(?は上昇イント.を表す)の省略として「スーツ?」という名詞疑問文で尋ねるところを、丁寧体にしたのであろう。省略形→その丁寧体という順序であって、その逆ではない。関東であれば末尾のスは無声化するため、上昇イント.を担いづらいのではないかと不審に思うのだが、事実は観念より遙かに大胆である。(このかたちが書きことばとなって文献に残ることはあり得るのか。今の書記法では、疑問符・イントネーションは共に表記されない。)

注10 話し手・聞き手にとって「既知・未知」か否かということが大事な要素になるものに、たとえば終助詞の一類がある。終助詞ネの機能について、ヨ・サと比べる佐治圭三の記述を下に挙げる。(『日本語の文法の研究』1991ひつじ書房)

ね——話し手の聞き手に対する「問いかけ、同意を求める」ような気持ち

よ——話し手の聞き手に対する「押しつける」ような気持ち

さ——聞き手にぼんと投げ出し、あとは言わなくてもわかっているはずだと言う態度

ここには次の要素が欠けているのではないだろうか。

ね：話し手はその叙述話題を聞き手も知っていることを前提に、働きかける

よ：話し手はその叙述話題を聞き手が知らないことを前提に、働きかける

さ：話し手はその叙述話題を聞き手が知ろうが知るまいが問題にせず、働きかける

以上